



IB Learner Profile No. 4: Communicators



コミュニケーションができる人

校長 青山 直志

今回のテーマは”Communicators” 「コミュニケーションができる人」とは、単に流暢に話すことができる人や明るく人に接することができる人を指すものではありません。IBでは、複数の言語や多様な方法を用いて、自信を持ち、創造的に考えや情報を理解し、表現できる人をイメージしています。自分の想いを自分の言葉でつむぎ、他者と豊かにつながる力。それこそが今、予測困難と言われる未来を生きる子供たちに必要な資質です。

さて、私が最近、日本語において気になって仕方がないことがあります。それは、街中や各種メディア、或いは子供たちの会話の中で、「～とか」「～というか」「～たり」といった語尾やつなぎ言葉が多用されていることです。例えば、「明日は雨とか降るみたい」「それって違うというか...」「勉強したり、遊んだりして」といった表現です。勿論、これらは文脈に柔らかなさを加えたり、相手との会話を円滑にしたりするクッションのような役割を果たすこともあります。しかし、あまりにも頻繁に使われる背景には、「自分の発言に対して責任を負いたくない」「断定して批判されるのを避けたい」という、ある種の保身や防衛本能が働いているのではないかと感じてしまうのです。曖昧な表現で自分の主張をぼかすことは、一時的に衝突や摩擦を避けるための安全な手段かもしれませんが、しかし、それを続けていると、自分が真に何を感じ、どう考えているのかという「思考の核心」までもが不鮮明になってしまいます。

このことに関連して、私自身の香港日本人学校に勤務していた頃の経験を思い出します。イギリス人やカナダ人、オーストラリア人の同僚と話をするとき、私はよく頭に「I think... (～だと思います)」をつけていました。すると、ある日こう言われました。「Is that true? (それ本当?)」

どうも「I think...」を繰り返すと自信がないのか、自分の意見に責任を持ちたくないのかのように感じられたようです。日本語を操る文化の中で、自分では相手への気遣いや丁寧な口調のつもりで使っていた言葉が、異文化や多様な背景を持つ人々が集まる場では、「意思が不透明で、責任を回避している姿勢」として受け取られていたのです。真のコミュニケーションとは、互いの立場や意見をはっきりとさせた上で、尊重し合い、対話を重ねていくことなのだと痛感した出来事でした。

ひるがえって、本校の子供たちの姿に目を向けてみましょう。本校の子供たちは非常に表情が豊かで、自分の想いやアイデアを身振り・手振りを交えながら全身で伝えようとします。その表現力やエネルギー、伝えたいという強い意欲は、本当に素晴らしく、本校の誇るべき強みだと感じています。

だからこそ、次の一步として子供たちに育てていきたいのが、「言葉そのものを精選し、シンプルかつ簡潔に相手に届ける表現力」です。身振り・手振りという感覚的な情熱に、客観的で筋の通った「的確な言葉」が組み合わさったとき、子供たちの発信力は世界中の誰にでも届く本物の強さへと昇華します。言葉を曖昧に濁さず、自分の思いに責任を持って「～です」「～と考えます」と明確に伝え切る経験を重ねてほしいと願っています。

そして、この課題は子供たちだけではなく、私たち教師自身もまた、日々の授業や指導、保護者の皆様との対話において、自らの言葉遣いを振り返る必要があります。曖昧な表現に逃げることなく、誠実で簡潔な言葉で相手に向き合っているか。自分の思考を研ぎ澄まし、伝える努力を怠っていないか。教師自身が言葉に対して自覚的であり、豊かなモデルであり続けたいのです。

言葉は、思考を形作る器というか、世界とつながる架け橋だったりします。子供たちが自分の考えとかを恐れずに言葉で表現したり、多様な人々との対話を楽しんだりすることで「コミュニケーションとかができる人」へ成長できると思ったりします・・・。
あれれ?!



校長室前の聖徳太子